

「量子放射線利用普及連絡協議会」第15回会合・議事メモ

1. 日時：平成24年5月14日(月) 13:30~16:30

2. 場所：虎ノ門琴平タワー 9階 第一会議室

3. 出席者（敬称略）：

〔講師〕（福島ステークホルダー調整協議会・事務局長）半谷

メンバー：勝村座長、(放医研)水野（代理出席）、(ONSA)大嶋、(原文振)桑原、(放射線教育フォーラム)田中、(日本原燃)田邊、(RI協会)東ヶ崎、(放振協)長島、(JAPI)中村(清)、(関原懇)西村、(北陸原懇)野村、(中部原懇)早川、(都産技研)武藤、(理研)本林、(ラジエ工業)渡辺、(電工会)綿貫、(医用財団)上野山

オブザーバー：(WEN)浅田

原産協会：石塚、八束、梶村、石田、塩澤、桐原

4. 配布資料

- ・ 家族のリスクマネジメント勉強会
- ・ 原発事故の影響を歯牙から調査
- ・ 平成24年度 研究会等企画内容(ONSA)
- ・ 原子力文化5月号(原文振)
- ・ 平成24年度第1回講演会開催案内、J A P I ニュースレター(12・2・4月号)(J A P I)
- ・ 平成24年度 原子炉実験・研修会案内(関原懇)
- ・ 私たちのくらしと放射線(北陸原懇)
- ・ 放射線・放射能の基礎と測定の実際(都産技研)
- ・ 社会に役立つ加速器—未知の世界をのぞく最前線レポート(電工会)
- ・ 福島とチェルノブイリ～虚構と真実～(原産協会)

5. 議事

議題1 「福島ステークホルダー調整協議会、AFTCの活動と福島からの思い」

福島ステークホルダー調整協議会 事務局長

たむらと子どもたちの未来を考える会(AFTC) 副代表 半谷 輝己 氏

議題2 各機関の活動予定他

6. 会合の概要

議題1 「福島ステークホルダー調整協議会、AFTCの活動と福島からの思い」

福島ステークホルダー調整協議会 事務局長

たむらと子どもたちの未来を考える会(AFTC) 副代表 半谷 輝己 氏

講演のポイント：

- ① 「マスコミ」に関することでは、原子力関係者もマスコミと対立するのではなく、マスコミの人と共に、福島の復旧・復興のために協力してほしいと思っている。マスコミは弱者側の立場から情報発信していて、被害感情の回復の役割を果たしている。私からは、「がんばろう福島」から、「SAVE福島」、福島を守ろう、ということを訴えたい。

- ② 住民は、「官僚」に対して不平・不満をものすごい勢いでぶつける。自治体の職員の方々は、自分の家族の面倒も見られずに、仕事に追われ、疲弊しきっている。これを救わなければならない。
- ③ 福島では、「ボランティア」が活躍できていない。ボランティアは、福島の人たちの役に立ち、友達になりたいと思って来ているが、受け入れ側では、それが分かっておらず、面倒なボランティアの受け入れを拒んでいる。福島が、「融和と調和」、「ボランティアの活躍」により、勝利の道を辿ることを望む。
- ④ 「お母さん」たちとのリスク・コミュニケーションにおける注意事項として、自分の言いたいこと、知っていることは言わないで、言ってもらいたい事を言う様にしている。つまり被災者のみなさんの気持ちを代弁することが大事である。福島の人たちにとって、原発事故によって出てきた放射線は、夫でも恋人でもない他人からのタバコの煙と同じ。ゼロにしたいのは当然。これを分かった上で話をしないと受け入れられない。
- ⑤ 「放射線の話」をする際に、放射線の専門家は、放射線の話ばかりしてつまらない。住民は、日常生活の中で放射線とどう付き合っていけばよいのかを知りたいのであって、放射線について知りたいわけではない。そして、ほとんどの人は、「単位」が嫌いなので、できるだけ余計な情報は削って、数字も出さないで説明する。映像で視覚に訴えることも効果的。

主な講演内容：

- ・ NHKが報道したNHK追跡！真相ファイル「低線量被ばく揺れる国際基準」についての毎日新聞の小島さんが主催した勉強会において、原子力関係者が「NHKに謝罪させる方法をレクチャーして欲しい」と相談した。その件について、参加者から「NHKは、今まで謝ったことがない。そんなところに「謝れっ！」というあなたたちが間違っている。」という意見が出された。私からは「原子力関係者は、マスコミと対立するのではなく、マスコミの人たちと一緒に福島の復旧・復興のために協力してほしい」と言った。その一件もあり、朝日新聞からは、日本記者クラブで講演を依頼された。
- ・ 伊達市では、リスク・コミュニケーションのアドバイザーをしている。私が講師をするリスク・コミュニケーションを、職員対象と市民集会あわせて、200回開催する予定である。今後、福島市、南相馬市、飯舘村でも実施する方向で模索している。
- ・ 南相馬市では、市の職員が150人も辞めた。南相馬市は、1年1ヶ月経っても、地震と津波の影響を受けたまま。車もひっくり返ったままで放置されている。「市の職員がいないということは、こういうことか」と思った。住民は、自分たちの生活に対する不安や不満を市の職員に激しくぶつける。不満のはけ口になっている市の職員を救わなければならない。
- ・ 南相馬市での除染を東大の児玉龍彦先生が実施した。放射線量は下がらなかったが、住民の方々は、「こんな偉い先生が、我々住民と一緒に汗をかいて、除染をしてくれた。本当に有難い。」と言って感謝していた。このよう場合、除染によって、放射線量は下がらなかったが、住民は不満に思うのではなく、感謝している。その活動により、放射線量が下がった下がらないの問題ではなく、意義のある活動であったと言えるであろう。
- ・ 賠償金の問題もある。伊達市の例では、ある家（Aさん宅）では、きれいに除染をして10mSv/年まで下げた。しかし、その隣の家（Bさん宅）は、除染をしなかったので、30mSv/年である。そうすると、Bさん宅では、10万円/人の賠償金が出るが、Aさん宅では、賠償金が出ないため、Aさんは、怒っている。伊達市も、「内閣府が決めたことだから・・・」と対応に困っている。このような努力が報われない課題が出てきている。

- ・ リスク・コミュニケーションにおける注意事項としては、自分の言いたいことは言わない、自分の知識を出さないことが重要。福島県民は、しゃべらない。ただ、待っているだけ。よって、彼らの意見を代弁して、「こうですよ？」と言ってあげることが大事。
- ・ SPEEDIの問題に対して福島県民は激しい怒りを感じているが、それ以上に、原発が爆発した時に（原子力安全・）保安院が、郡山市に逃げたことにも、激しいショックと共に怒りを感じている。しかし、あの状況下で、文科省は、（放射線測定のために）原発に向かって突っ込んでいった。あの文科省の姿勢は、すごいと思った。（原子力安全・）保安院と文科省の対照的なスタンスの違いを感じた。
- ・ 私は、幼少期を原発から3 kmのところでも過ごした。午後5時になるとテレビで原発の安全性を説明する放送が流れ、放射線について学習する機会もあったので、放射線に関する基礎的な知識があった。アルファ線や、ベータ線、ガンマ線は障害物があれば止まるが、中性子線は、いろんなものを突き抜けることを知っていたので、今回の原発事故の際に中性子線のことが気になった。自分の家族の体調が優れなかったりすると、中性子線の影響じゃないかと心配したが、それを専門家に言ったら、「そんなに中性子線が出ていたら、原発の周りの松林が全部赤茶けているはずだよ」と言われた。国や東電は、嘘をつくかもしれないが、「松林は嘘をつかない」と思って安心した。
- ・ 私は、原発事故後の早い時期に放医研に行って、汚染検査をしてもらった。特に心配するような汚染はなく安心した。このような自身のデータを提示しながら、市民の皆さんに説明すると安心していただける。
- ・ お母さんたちは、子どもへの放射線の影響を非常に心配している。「人体からも放射線が出ているのですよ（1.9 μ Sv/日）」と言うと、（赤ちゃんの被ばくを気にして）抱っこしていた赤ちゃんを咄嗟に離して、下に置いたお母さんもいたが、赤ちゃんからも放射線が出ているという私の話を聴いて、安心してまた、抱っこして帰っていった。
- ・ お母さんたちが最もナーバスになる時期は、やはり妊娠中であり、胎児への放射線影響についても、非常に心配している。胎児の身体は、アポトーシスの機能が高く、自分で自分の細胞を修復する能力に優れていることを説明すると、とても安心する。子どものことを心配しているお母さん方の心の除染が必要である。
- ・ 私のリスク・コミュニケーションは、専門家から言わせると、「リスク・コミュニケーションではない。リスク・コミュニケーションとは、データを示して説明し、リスクを理解してもらって行うもの」と言われるが、私は、データや数字を提示して説明するのではなく、文化的な方法で安心してもらえるような説明を行っている。非科学的と批判されることもあるが、この方法で安心してくださる方も多い。学会等では、詳細なデータを示して、説明すべきであるが、住民の方への説明は、極力、単位や数字、難しい言葉を使わずに説明するほうが良いと思っている。
- ・ 先日、「半谷さんは、この（福島事故後の福島の復旧・復興のための）活動をするために生まれてきたような方ね」と言われた。私の活動について、批判をする人もいると思うが、私は、様々な分野の方々との繋がり、「融和と調和」を大事にして、今後も福島の復旧と復興に尽力していきたい。

主な質疑応答：

Q（原文振・桑原氏）：①川内村で放射線の勉強会等を実施しているが、福島の人が自分から話をしないという印象はない。結構、勉強されていて、ベクレルからシーベルトへの換算について聞かれたりする。福島の人が自分から話をしないというのは、一概に言えないのではないかと②厚労省とは、どの程度繋

がりがあるのか？③除染活動についてどのように考えているか？

A（半谷氏）：①川内村の人が自分から話をしたのは、川内村の放射線量が低いからであろう。放射線量が低いところでは、結構、放射線について自分から質問したりする人も多い。②厚労省とは、歯牙のスクリーニングの件についての支援等を一緒に行っている。③除染活動については、やはり、除染しないと住めないところもあるので、放射線量の高いところは除染してあげないといけないと思う。また、福島住民の中に入っていく場合は、保健師さんなどが入っていかないとダメ。行政が行くと、いじめられて帰ってくるので、他の地域の方が支援する場合も、保健師さんと一緒に活動すると良いと思う。

Q（放射線教育フォーラム・田中氏）：理科人間の者には、大変刺激的な講演内容であった。半谷さんのように、綾小路きみまろを髣髴させるような面白いトークによるコミュニケーションは真似できるものではないが、その上に立ってわれわれのような普通の理科人間にも役立つようなアドバイスを半谷さんのNPO法人（たむらと子どもたちの未来を考える会）のホームページで公開していただけると有難い。

A（半谷氏）：福島県庁除染対策課では、環境省の除染対策課を利用して、私のコピーを作ろうとしている。厚労省でもそのような動きがあった様だが、まだはっきりしない。私の活動をマニュアル化できるかは分からないが、マニュアル化や分析をしていく考えはある。まず大切なことは、福島の方々に対して善意を持って接する。また、自分の分かっていることを言わないことが重要。余計な情報を省き、やさしい言葉で、ビジュアルも入れて提示すると良い。勿論、私1人で福島を救えるわけではないので、このような活動を広めるためにも、NPO法人（たむらと子どもたちの未来を考える会）のホームページに何か公開できるスキルがあれば、公開していきたい。

C（日本原燃・田邊氏）：私も、青森県を中心に住民の方々への放射線に関する勉強会を開催し、多くの方々には話をしてきた。放射線の専門家は、放射線の分野だけの話をしようとするが、それでは、住民の方々の中には、響かない。一般の方々には、放射線のことだけではなく、日常生活の全てのことや、全てのリスクについて関心があり、放射線というのは、それら多くの中の1つに過ぎない。お母さん方の立場に立って、お母さんたちは、何に興味があり、何を考えているのかをよく考えて、話しかけることによって、納得というか、同じ土俵に立って話ができるのだと思う。

C（半谷氏）：私は、塾の講師をしているが、塾の講師というのは、学校の先生と違って、必ず、生徒の成績を上げなければならない。学校の先生は、父兄を呼びつけて「この子が、こんなことをして困ります」と言えるが、塾の講師は言えない。親に言えないような生徒の様々な悩みも、なんとか解決しなければならず、多くの問題を解決してきた。そのような経験が、今の私の活動に生かされていると思う。また、地域にはその地域の風習や慣習がある。それらを理解しないで活動すると、大変な誤解を招くことにもなりかねない。福島で活動する場合に気をつけたほうが良いことや、様々な福島における慣習等についてのアドバイスもできると思う。ちなみに、福島に女性が入ってくる場合は、スカートと口紅はダメ。髪の毛もあまり手をかけていないような感じの方が良い。

Q（関原懇・西村氏）：福島のことを思って、いかに生活感のある説明をするかというのは、簡単にマニュアル化できるものではないと感じている。昨年6月に伊達市霊山町に入って線量測定をしていた時に、住民の方は、その線量測定の様子に興味深く見ていた。そして、話しかけてきたので、短い時間ではあったが、測定について話をしたりした。住民の方は、たぶん、そのような測定をしている姿や、誠実に対応してくれるか等の姿勢を見ているのではないかと思った。関西では、福島のために、瓦礫の受け入れ等では協力ができると思うが、その他に何かできることはあるか？

A (半谷氏) : 私は、このように福島や他の地域でも勉強会を開いて話をしているが、私が話をするのが適さない方々もいらっしゃる。私は、女性には受けがいいが、男性には、受けがあまり良くない。男性は、組織を重視するので、「塾の講師が何を言っている！」という感情を持つことがある。男性の住民の方々には、皆さんのような放射線の専門家から説明されるほうが良いと思う。また、余談ではあるが、今回の原発事故に対する役所の対応を見ていて、面白いと思った。文科省は父性的な考えを持っており、転んだ子が泣いていたら、「何、いつまでも泣いているんだっ！」と怒鳴るような印象。それに対して、厚労省は、「どうした？」と言って、痛いところを擦ってあげるような組織であるという印象を持った。

Q (JAPI・中村氏) : 大変、刺激的な講演をしていただき、感謝している。今まで、世界中の自然放射線の高い地域のデータに基づいて、放射線の話をしてきた。半谷先生の講演を聞いて、それだけではいけないと思いつつも、我々にはこれしかない。何か、アドバイスはあるか？

A (半谷氏) : 先ほどお話した通り、男性への説明には、そのようなデータを基に話すほうがよいのではないかと思う。また、自治体の職員の方々への勉強会の際には、様々なデータが必要なもので、そのような際には、皆様のご協力をいただきたい。

C (都産技研・武藤氏) : 福島の方が、子どもへの放射線教育に文科省が作った放射線の副読本を用いたことに怒っている、ということを知った。私は、なぜ怒っているのか、それでは、どこが作った副読本なら良いのか？と怒っている理由が理解できなかった。しかし、どうやら、放射線が安全だというようなことが書いてあるので、怒っているようであった。

A (半谷氏) : お母さんたちにとっては、「放射線は危険だ」と言ってくれる人が味方なので、低線量であっても、放射線が安全と言った途端に、話を聴いてくれなくなる。

Q (放射線教育フォーラム・田中氏) : 文科省の副読本に関しては、どのようにお考えか？

A (半谷氏) : 小学校の先生には、難しすぎる内容だと思う。

Q (WEN・浅田氏) : 私の孫が、綾小路きみまろの大ファンである。半谷さんと同様、綾小路きみまろも弱者の心をうまく掴んでいるところが、小学校5年生の孫にも受けているところだと思う。WENでは、「くらしと放射線」ということで、くらしに役立っている放射線のことを紹介しながら、放射線に対する理解を深めていただくような活動をしている。3.11以降、(放射線に関する)情報が洪水のように氾濫している。洪水のように氾濫しているデータを整理して、セレクトして、「安全、安心、大丈夫」という言葉は使わずに、一般市民の方々とお話をしていきたいと思っている。WENでは、今まで、福島からは専門家や地元の方にお任せし、福島から離れた地域での活動をしてきた。食生活に関しては、バランスよく食べていくことが必要と思う。今後は、少し踏み込んで、福島の方々とも交流をしていきたいと思っている。

C (半谷氏) : バランスの取れた食事をし、「今まで通りの生活をしていていいんだ」と納得してもらおうことが重要と思う。よく専門家の方は、さんざん放射線のことを説明した後に、「決めるのは、皆さんです」と言う。そうすると、聞いている人は引いてしまうので、私はよく、「(何かあったら)責任を取ってくれるのか！」と詰め寄られることがあるが、「責任は取ります！」と言い切っている(笑)。

C (ONSA・大嶋氏)：大阪府では、瓦礫の受け入れ基準として、100ベクレル／kg という基準を作った。しかし、住民は受け入れに反対した。そこで、私は「人は、だいたい110ベクレル／kg の放射能を持っている。あなたたちが死んだときに、火葬場で、「放射能が（基準を超えた110ベクレル）あるので受け入れられません！」と言われたらどうしますか？」と言った。数字を使わないで説明する方が良いというが、ある程度は、数字を使わないと納得してもらえないと思う。

C (半谷氏)：田村市小野町での最終処分場の8,000Bq/kg以下の産業廃棄物の受け入れに関する反対運動に対しても、解決に向けた活動をしている。反対運動をしている市議会議員にも話を聞いたが、「(自分も反対運動をしていて) さもしい、心がすさんでいく」と言っていた。「しかし、反対と言わないと、次期当選は無理」とこぼしていた。瓦礫の問題は、日本人全体の問題。一政治家に解決できる問題ではない。私は、住民、政治家、自治体、産廃業者で勉強会や議論をし、国民に対して何が出来て何が出来ないかを明確にして共同声明を出してはどうかと提案している。このような共同声明という形は、初めての試みではないかと思う。

C (勝村座長)：住民の半分は女性であるので、女性に理解していただくことは重要と思う。男性は、組織の論理が優先するし、ロジカルな面もある。地方の自治体の職員が疲弊していて、疲れが出ているということも、非常に大きな問題。このあたりで、スイッチのモードを入れ換える必要があるように思う。国を介してのアプローチはあまりうまく行っていないようにも見受けられる。放射線の副読本も、学者のみで議論するのは良くない。女性にも参画してもらったほうが良い。副読本を使う側の人をチェックしてくれるとよいと思う。

C (半谷氏)：学生への授業で最も盛り上がらないのが、「単位」の授業。人は、「単位」が嫌いである。よって、私の放射線の講演では、「単位」の話は一切しない。

Q (放射線教育フォーラム・田中氏)：今後の福島がどのようになっていったらよいと思っているか？

A (半谷氏)：今後は、「帰りたい人は、帰ろう！」というメッセージを出していきたい。昨年11月に私の母が原発から3kmの双葉町から、田村市や新潟市、役場が移転した埼玉県と移り住み、42kgあった体重が半分以下の20kgに減り、病院で衰弱して亡くなった。無理な避難によるダメージはとて大きいと感じている。その時に、自分が何もできなかったという悔しい思いもあり、今、このような活動をしている。今も、新潟や米沢にまで避難している人がたくさんいる。早く、避難先から福島に戻ってきてほしいと思っている。

議題2 各機関の活動予定他

・各機関活動予定等について各構成員より説明があった。

以 上